

会が、劇を通じてお互いに仲良くなり、すぐくまとまりができてきた。みなで一つのを力を合わせてつくり上げた、そのことが組織づくりにつながったのである。このつながりが、後に衛生指導員不要論が出てきたときに、大きな力を発揮するようになるうとは、そのときは誰も予想しなかった。

第一回目の演劇上演の大成功に、指導員たちはみなで喜びを分かち合いながら、来年もぜひ劇をやろうと固く申し合わせた。

### 一旦は中止を決めたが

ところが一年たって、次の健康まつりの取り組みを考える時期が来たとき、衛生指導員会では、なぜかあのときの感動よりも、苦勞ばかりがみな頭の頭に残っていた。「劇はよかったけれど、あんな大変なのはやりたくねえな」と誰かが言った。

いろいろ議論の結果、毎年は大変だからということ、今回は劇は休むことに決定してしまつた。

その頃、指導員会が終わると必ず一杯やることが決まっていた。その夜も大勢の指導員が飲み屋に流れていった。指導員会に出ていた役場の担当者や病院の八千穂担当もいっしょである。その席でいろいろ話すうち、指導員たちは劇をやめたことに、どこかに引っ掛かるものがあつ

たようだ。

お酒がまわる中で、指導員の井出正さんが、病院の飯島郁夫さんからんできた。「おめとう（お前たち）は、本当は劇をやって欲しいと思っっているずら。そんならそうとみんなに言ったらどうだ」と。

「それはやったほうがいいと思うけど、無理矢理やっても仕方がないし、みんなの気持がいつしよにならなければ意味がないじゃない」と飯島さん。井出さんはさらに声を荒げた。「かっこいいことを言うな！本当は劇をやってほしいとみんなに言え」。

飯島さんも井出さんの気持ちはよく分かっていて、井出さんもその夜は何かすっきりしないものがあつたようである。

### 若手の意見で劇を復活

それから数日したある夜、桜井三郎、内藤勇市、渡辺春雄、桜本源一郎さんら、指導員若手メンバーが焼鳥屋に集まり、一杯飲んでいた。その中で、劇は毎年続けなければ意味がない、どうでも復活させようという話になった。

四人は、早速その場に会長の高見沢さん呼び出した。高見沢さんはなんのことやら分からず焼鳥屋に駆けつけたが、劇をやるとういう若手メンバーの話聞いていううちに次第に嬉し

さが込み上げてきた。すごいぞ！うちの若手たちは。

次の日、高見沢さんは役場にとんでいき、緊急に指導員会議を開いてもらうよう申し入れた。そんな人たちの前向きの姿勢に動かされ、結局その年も「健康まつり」で、指導員が演劇にとりくむことが決まった。

内容は、若手メンバーがすでに話し合っており、すんなり決まった。八千穂村の健康管理の歴史をやるというのである。脚本をまかされた高見沢さんはテーマの大きさに難渋した。昭和三十四年になぜ全村健康管理が始まったのか、当時の人たちはどんな考えを持っていたのか。高見沢さんは取材に走り回り、役場や病院の資料を引っ繰り返した。そして長編の「生きる」という脚本が漸く完成した。

一回目に比べて倍以上に長かったけれど、みんなの力が入っていたので、練習はやりやすかった。役者には、村から保健婦の中島幸枝さん、病院からも保健婦の佐々木（現姓・菊池）徳子さんと佐々木（現姓・高柳）ひろみさんが参加、協力することになった。

指導員の内藤勇市さんは専門が看板屋さん、同じく桜本源一郎さんは大工さんなので、舞台づくりはお手のもの。内藤さんは、立て看板をつくりながら、何とか工夫して人を寄せつけるような内容にしようと思いを打ち込んだ。

健康まつりの当日、集まった人たちは、自分の村の健康管理の歴史を熱心に観てくれた。

### なくてはならなくなった演劇

さて、三年目。もう劇は「健康まつり」にはなくてはならないものになっていた。衛生指導員で反対するものは誰もいなかった。村の人たちも、健康まつりの指導員の劇を毎年待ち望むようになった。問題は、村の人たちに何を観てもらおうかということであった。

最初は健診を受けようとか、健康とは何かを考えようといった内容が多かった。しかし時代の流れの中で、村でもお年寄りの問題、寝たきり老人の介護の問題が始まっていた。テーマは必然的にお年寄りの問題に移っていった。

そのような中から、さまざまな地域で上演されるようになった名作「看る」が生まれた（第五作目）。この上演の様子は、「プロローグ」に示したとおりだ。現在、高見沢さんの書いた脚本は四十数本に及ぶ。この大部分は衛生指導員が上演している。

演劇は問題提起だという。地域住民に問題を提起し、そして住民自身のみずから考え、みんなで話し合う。そこから住民を巻き込んでの新しい活動が始まる。その機会を演劇がつくってくれる。

今や演劇活動は、指導員活動のいのちになった。

VI

衛生指導員に激動の嵐



健康まつりでのストレッチ体操

## 健診日程に指導員会が反発

### 日本一の長寿の村を

衛生指導員の「健康まつり」での演劇上演はとても評判になった。あちこちの地区からも上演を依頼されるようになった。それは八千穂村だけに限らなかつた。毎年五月の小満祭に合わせて行われる佐久病院の「病院祭」にも、いくつか上演するまでもなった。これからの衛生指導員活動にとって、演劇上演が大きな弾みになったように思われた。

ところが、実際はそううまくは運ばなかつた。一つは、昭和六十一年に役場の衛生係が代わつて、健康管理の進め方がガラリと変わってしまったのである。

年度が新しくなつて、佐々木（澄雄）村長は、「どうしたら日本一の長寿と健康の村になれるか、よく考えてくれ」と担当課に命じた。村長は以前から、「日本一の長寿と健康な村をめざそう」というスローガンをかけ、それを記した柱を国道一四一号線の道路脇に建てていた。

村長から言われて、住民課ではどうしたらよいかと頭をひねつた。長寿を実現するには、疾病の早期発見や生活習慣の改善に力を入れなければならぬが、よく考えてみると、今までの健康管理は、佐久病院におんぶにだつこの面が多かつた。もっと役場が主体になつて進めなけ

ればいけない。

その考えはよかったのだが、役場主導にこだわり過ぎて問題が生じた。

### 村の健診日程の作成が反発を招く

昭和六十一年十一月、村の総合健診の時期がやってきた。衛生係は、これは役場の仕事だと、全地区の健診日程を作成して、衛生指導員会にかけた。ところが予め健診日程が決められていたことに、指導員たちは反発した。

今までの健診日程の決め方は、衛生指導員会で、それぞれの地区の希望を出しながら、皆で相談して決めていた。「俺の担当地区は雪が降るのが早いので、年内にやってくれ」とか、「暮れは商店街が忙しいから、正月が過ぎてからにしてくれ」とか、希望を出し合って決めた。受診率を上げるためには、できるだけ皆の都合の良いときに健診をしたいというのが、衛生指導員の願いだっただ。

日程がかち合ったときは話し合って決めたが、時にはかち合った両者が譲らず、喧嘩になったこともあった。それだけ、日程編成には皆真剣に取り組んだ。

また衛生指導員は、自分の担当地区だけでなく、他の地区へも交代で参加して、お互いどうし援助しあった。

それはまた、指導員の学習の機会でもあった。「この地区はこんなやり方をやっているね」とか、「ああいうやり方はいいね。うちでも取り入れよう」とか、「こうやったら受診率が上がるのか」とか、その地区の取り組みを見て、お互いの参考にしたのである。極端に言えば、他の地区のやり方を盗みに行ったといってもよい。

誰がどこの地区へ手伝いに行くかも、希望に応じて皆で相談して決めた。飯島都夫さんは、佐久病院の健康管理部に入って、初めて衛生指導員会に参加したとき、その日程の決め方を見て「これはすげえな」とびっくりした。こんな住民主体のやり方は、どこの町村でもやっていないことであった。

それが相談なしに、役場で一方的に日程が決められ、さらにお手伝いは、婦人推進員がいるため、指導員は不用になったと説明された。

これには衛生指導員たちも頭にきた。「勝手に決めないでほしい」「担当区になんと言ったらよいか」「担当区にこんなこと言えねえや」など意見が相次いだ。衛生指導員には、地区から推薦され、地区の声を代表する保健活動家としての責任がある。

各地区の健診が全部終わって、衛生指導員、衛生部長、婦人推進員の合同会議があったときに、高見沢さんは会長として、こう言った。「このやり方は合理的かもしれないが、どんな良い方法を考えても、一方的にやられては皆が納得しないし、一所懸命にやろうとしている者ほ



ど、がっくりしてやらなくなる。もうちょっと相談をかけてやってくれ」と。

#### 婦人の健康づくり推進員の強化へ

もう一つ、衛生指導員に問題を投げかけたのは、「婦人の健康づくり推進員」の組織化のことがあった。

婦人の健康づくり推進員（以下婦人推進員と略す）は、既に昭和五十九年に四十人設置されていて、衛生指導員の補助的な役として、健康健診やその報告会とか、健康まつりの際に活動していた。その組織をもっと強化して、健康管理の仕事に本格的に参加できるようにしたいと衛生係は考えた。

殆どの町村では、すでに婦人推進員（名前は各町村で異なり、保健指導員とか、健康推進員とかいろいろある）という組織がきちんとできており、行政の手となり足となり活躍していた。県や佐久地区単位での組織もできており、年一回の集まりもある。

かつてその佐久地区の集まりのときに、指導員も行ってくと村から頼まれ、小宮山則男さんや高見沢佳秀さんから三人が出席して発表したことがある。そのとき、当然ながら男性は八千穂村だけだったが、集まった各町村の出席者たちは、八千穂村の男性の衛生指導員という組織を羨ましがった。

しかし役場からすれば、衛生の仕事を進めていくのに、なんとしても他の町村の婦人推進員というのは魅力的に見えた。より深く地域に根ざした健康管理活動を進めるためには、女性の力を抜きにしては考えられないと担当は考えた。

婦人推進員の強化という考えは、健康管理推進には大きな力になると思われたのだが、これが衛生指導員との間に摩擦を起こすことになった。

## 衛生指導員廃止の動きが出る

### 婦人推進員の組織を確立

村の衛生係はいろいろ考えたが、健康管理をもっと推進するには、今の十四人の衛生指導員ではとても足りないと思った。そこで、四十人の婦人の健康づくり推進員の組織をガッチリと固め、本格的に活動してもらおうことに決めた。

まず取り組んだのが、婦人検診の希望者取りまとめである。男性の衛生指導員が婦人検診の取りまとめをするのは、やはりやりにくい面がある。聞くほうも聞きにくいし、答えるほうも「あんた受けるの、受けないの」としつこく聞かれるのは嫌だ。そういうわけで、婦人推進員

による取りまとめはとても好評だった。そのせいか受診率が大幅にアップした。

衛生係は言う。「婦人推進員はよく動くね。小回りが効く。それに予め婦人推進員を集めて料理講習会をやっておくと、健診の報告会するときや、糖尿病教室やがん予防教室をやるときに頼めばどの区でもパツと料理講習会を開いてくれる」と。それに婦人は、日頃の付き合いが村の中にある。ふだんの人間関係ができているから、それがいざというときに効いてくる。

「婦人推進員だと「ちょっと来てえ」「ハイよ」と、すぐ人集めをしてもらえるが、衛生指導員は、日頃動めている人が多いから、そういう気さくなことはむずかしいね」と係は言う。つまり、女性のほうが事業展開がとてもしやすいということだった。

衛生指導員としては存在意義が疑われる状況となったのだが、指導員自身にも反省点があった。演劇への取り組みはいいとしても、衛生指導員の日常活動、地域活動に問題がなくなかった。とても熱心に取り組む人もいるが、そうでない人も若干いる。健診の取りまとめもなかなか出してくれなかったり、指導員会議にも、出て来ない人もいた。

これには、指導員に勤めの人が多くなってきたことと関係がある。

活動するには、夜か、休日のとときしかない。どうしても取りくみが遅れがちになる。十四人が一―三の地区を担当して責任もっているから、一人でも報告が遅れても係は大変困る。それに対して婦人推進員は各地区ごとにいるので取りくみが早い。活動も昼間に出来る。

「指導員をなくします！」

婦人推進員が活躍するにつれて衛生指導員の役割が問題になってきた。同じような業務を持つ組織がなぜ二つあるんだということが役場内でも問題になった。役割をもう少し整理しろとも言われた。とくに財政の方からは、衛生指導員と婦人推進員の報酬のことが問題になった。会議の際の日当のことである。

昭和六十一年秋頃から、次第に、衛生指導員はいらないのではないかという声が囁かれるようになった。婦人推進員だけで十分だということである。

佐久病院の八千穂担当と役場の衛生係とは、毎月一回事務局会議を開いて、健康管理の打ち合わせを行っている。六十二年の一月の会議で、飯島郁夫さんは、衛生係に「衛生指導員をなくすつもりなのか」と聞いた。すると衛生係は即座に「なくします！」と答えた。その理由は、とても財政が厳しいからだということであった。

飯島さんはビックリして、早速高見沢さんに伝える。高見沢さんはこれはエライことだと、トラさんに電話する。トラさんは第一期衛生指導員会長であり、村議会議員もやった。トラさんは、「そんなことは絶対ねえよ」と言いながら、「待て、おれが調べてくるから」と役場へとんでいった。

トラさんは、早速、佐々木村長のところへ行って、そのことを問いただしたが、村長は「そんなことは聞いていないよ」という返事だった。まだ村長のところまで上がってはいなかったのだった。トラさんはホッと胸をなで下ろしたが、それで安心するのはまだ早かった。

### 自主的な指導員会議に

六十二年二月になって、住民課から、衛生指導員の三役（会長と二人の副会長）が呼び出された。そのとき、「今までは指導員のみなさんとは、月に一回会議をやっていたけれども、これからは経費節減のため、何かやるときだけ指導員会議を開くことにする」と申し渡された。

これを聞いて、三役は困ったと思った。指導員会議が開かれなければお互いのコミュニケーションがとれなくなる。どうすればよいかとお互いに話し合った結果、手当ては出なくとも、自主的な指導員会議を毎月一回、自分たちで開くことを決めた。

今までは会議の開催通知は役場から出たが、これからは出なくなった。そこで指導員会で通知を出すことにしたが、今までは必ず出席していた衛生係は出なくなった。

健康管理の仕事は、役場主導で進めることになったので、衛生指導員は会議で協議する議題がなくなった。そこで、病院の医師や担当者を呼んで、学習会を主としてやることにした。

「これからの衛生指導員活動はどのようにやったらよいのか」「各地区ではどのように取り組

んだらよいか」について、かなり議論を交わした。衛生指導員は役場の単なる下請け機関ではないぞという思いがそこにあった。演劇の上演以来、一つにまとまった衛生指導員たちは、「村にどうしてもなくてはならない組織にしよう」と意気込みはさかんであった。

この状態で約一年は過ぎたが、やがて住民課では協議を重ねた結果、衛生指導員は健康管理の中でリーダーシップをとってもらうこと、環境衛生の仕事は従来どおりやることということで片がついた。衛生指導員会の規約にも、はっきりそのことが盛り込まれた。

しかし、各集団健診の受診勧奨と健診のお手伝いは婦人推進員の手に移っていった。

## 村民ドックでまたひと揉め

### 観光開発よりも人間ドックを

昭和六十一年ごろから、八千穂村では「八千穂高原開発構想」が進められていた。ゴルフ場を含めた観光開発である。その理由は、開発によって自主財源を確保したいということであったが、当時は南北佐久地域を通じて、スキー場やゴルフ場をつくることが一種のブームになっていた。

早速、藤田観光らが乗り出してきたが、これをいちばん危惧したのは、八千穂村議会の小椋茂議員であった。議会が開かれるたびに執拗に質問を繰り返し、その経済効果には疑問があるとし、また八千穂村の美しい緑と水が破壊される心配があることを訴えた。

その代わり、以前から八千穂村では健康管理の村をうたっているのだから、がん対策として、人間ドックを全員にやったらどうかと提案した。

八千穂村では健康管理を始めて三十年近くにもなるが、まだがんによる死亡者が年間八人から十人は出ている。日本一健康で長寿の村を目指すならば、まずがん死亡をなくすことである。さらになんて手遅れになると、一人で数百万円の医療費がかかる。もし一人助ければ、それだけの国保医療費が助かるではないかというのである。

これはなかなか説得力のある意見であった。議会でいろいろ論議の末、佐々木村長も最終的には賛成し、観光開発は中止、人間ドックをすすめることになった。

問題は人間ドックの財源をどうするかということであったが、別荘地を貸し付けるといふことで、なんとか確保できるという見通しがついた。そこで、六十三年度から実施と決まった。

## 「もつと住民の意見を聞いてほしい」

あまりにも早い決定に、衛生指導員も佐久病院の担当者もびっくりした。以前に一般健診から集団健康スクリーニングに移行するときは、一年間かけて、やるかやらないかと随分論議を重ねたことがあったからである。

そのときは佐久病院からの提案であったが、今回は村からの要望である。住民課ではそれを受けて三十五歳から六十九歳の約千人に実施することにしたが、人間ドックは、新しく八千穂村に開業した八千穂クリニックの青木医師にやってもらうことにし、佐久病院は従来の健診を続けてやるというふうに、一方的に決めてしまった。

驚いた衛生指導員たちは、「なぜそのように決めたのか」と衛生係に質問したら、衛生係は「そのほうがやりやすいから」と答えた。そこで「受ける側の意見を聞かなくてもいいのか」「もつと住民の意見を聞いてほしい」と指導員たちが反発した。

もちろん佐久病院も人間ドックは以前からやっていたし、十分受け入れられる態勢は整っていた。それに検査設備の整っている病院のほうが、本来は人間ドックに適している。

一方、人間ドックは最高によい健診だが費用がかかる。

村の健康管理を進めていくには、暮らしも直しながら、がん検診や婦人検診やその精検も含めて、年間にわたって各検診のたびに、いつも自分の体をチェックしていくチャンスがある集



団健診と健康教育のほうか、より適しているという点もある。だから、ドックをいきなり村の健康管理にするのはどうなんだろうかという意見もあった。

だが集団健診だけでは、がんの早期発見は無理な点もある。岩手県の沢内村でもドック式の健診をやっていて効果をあげている。がんの早期発見にはぜひ人間ドックをといる村の意見も、もつともな点がある。

それに最近はお勤め人が増えてきているので、一回で検査がすべてできる人間ドックのほうか便利だと衛生係は主張した。

#### 衛生指導員会も意見が真二つに

衛生指導員の間でも意見が真二つに分かれた。「人間ドックはいちばんいいから、すぐでも進めるべきだ」という意見と「いや、個人負担のこともあるし、もう少し住民に説明し、よく検討してからのほうがよくはないか」という意見があつて議論が沸騰した。

たまたま衛生指導員会の勉強会に出た佐久病院の井益雄医師が、「人間ドックもいいけど、集団健診にもこんないいところがあるんだよ」と、例をあげていろいろ説明したところ、ある指導員が「あんた、何を言うんだ」と食つてかかった。「ドックがいちばんいいのに決まっているじゃないか」と口論になり、もう少しで喧嘩になりそうであつた。あわてて、飯島郁夫

さんが止めに入るといふ一幕もあった。

人間ドックをやるといふ村の方針が、討議が十分でないまま、あまりにも早く決まってしまうので、衛生指導員にも病院側にも若干のとまどいがあったのは当然だったろう。

いろいろ議論があったが、結局人間ドックは一年おきに、従来の総合検診と交互に、佐久病院と八千穂クリニックの両方でやることに決まった。どちらを受診するかは住民の選択にまかせるといふものであった。住民の意向が考慮されたのはまあよかったといえる。

問題は経費だが、日帰りドックの費用三万二千円のうち、個人負担は一万円で、残りは村で出すことに決まった。国保からさらに七千円の補助があるので、国保加入者は三千円の負担ですむことになった。わずかな費用でドックが受けられるとあって、総合健診と合わせた受診率は飛躍的に向上した。今まで集団健診を受診しなかった人が初めてドックを受診した例もあり、未受診者の掘り起こしには大きく役立つといえよう。

しかし、一年おきに受けたとしても、村の負担は毎年平均約千五百万円と相当大きいものであった。つい一年前に財政難を理由に、衛生指導員会を止めるといわれた指導員たちには、なにか割り切れない感じが残った。

## 乗り切った激動の四年間

### 問題が続いた四年間

昭和六十年から六十三年までの四年間を、当時任期中だった衛生指導員たちは「激動の四年間」と呼ぶ。

就任当時は十三人の殆どが初対面だった。最初は早くお互いを知らうと、また良き仲間づくりをしようと、何かにつけて飲み会をした。でも本当に心を合わせ、力を合わせる事ができたのは、健康まつりに初めて演劇に取り組んだときであった。監督を中心に、配役、スタッフ、役場、病院の担当が一つになり、すばらしい劇をつくり上げた。

これがきっかけとなって、指導員が一つにまとまり、地域のためにどう取り組んでいこうかと張り切っていた矢先、役場の担当が代わってしまった。その後、婦人の健康づくり推進員の設置と役割の移管、衛生指導員廃止の問題、それに人間ドックの実施と、さまざまな大きな問題が続いたことは、前に述べたとおりである。

役場の衛生係と衛生指導員は、健康管理の進め方で対立することもしばしばだった。ある意味では、衛生指導員の活動が試された時期だったし、成りゆきによっては、全村健康管理の根

幹を揺るがしかねない問題も含んでいた。

健康管理部の八千穂担当だった佐々木（現姓・菊池）徳子保健婦は、たまりかねて指導員会長の高見沢さんにこう手紙を書く。

「善し悪しは別として、八千穂村健康管理が始まって以来の厳しい状況にあると思います。村がこれまでやって来たことをどう評価するかによつては、三十年の歴史はある意味でひっくり返ってしまうかもしれません。（中略）

個々の感情のすれちがいの問題もあるけれど、大局に立って、八千穂村全体の歴史と今後を考えるとき、今やらなければならぬことは何かをお互いに考えなければいけないと思います。指導員さんたちも、冷静にもう一度原点に返って、これまで何のためにやってきたのかを振り返ってみる必要があるかもしれません」と。

これには、病院の担当者もみな同じ思いであつたろう。

### 指導員が小冊子をつくる

ともあれ四年の任期が終わって、十三名中十名の指導員がこれで交代することになった。そこで指導員たちは、四年間の活動記録と感想をまとめた「激動の四年間」という小冊子を作成した。